

新疆におけるウイグル族の中国語教育、 学習の現状について

費 燕

一. 新疆の地理と社会環境

故郷を懐かしむためか、初めて出会った中国人からは、よく「出身はどこですか」と聞かれる。「新疆です」と答えると、ほとんどの人が驚きを隠せず「原籍はどこか、ラクダに乗るのかなどの質問を受けることも珍しくない。中国人にとっても新疆ははるかに遠く、神秘的で、発展の遅れたゴビ砂漠の中にあるという印象が強いのだろう。そこで、新疆におけるウイグル族の中国語教育、学習の現状を見る前に、先ず新疆の地理、社会環境を紹介したい。

新疆はウイグル自治区で、中国の西北部にある。近辺にモンゴル、ロシア、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インドの八つの国があって、国内ではチベット、青海省、甘粛省と接している。自治区の総面積は166.49平方キロメートルで、中国全土面積の六分の一を占めている。「三峽両盆」（三峽は阿爾泰山脈、天山山脈、崑崙山脈の三つの山脈、両盆はタリム盆地とジュンガル盆地をさす）という地形的特徴があり、新疆は、天山山脈を中軸に北疆と南疆に分けられている。一つ一つの都市がそれぞれ一つのオアシスにあり、そのオアシスとオアシスの間は1本の道路で繋がっている。新疆は総人口が1925万人で、47の民族を擁する多民族、多言語の地区として知られている。遙か昔からここに居住している民族としてはウイグル族、漢民族、カザフ族、回族、モンゴル族、キルギス族、シボ族、タジク族、ウズベク族、満州族、ダウル族、タタル族、ロシア族等の13民族がある。そのうち、ウイグル族の人口は834.56万余りで、総人口の43.35%を占め、その次に多いのは漢民族で、人口は828.04万、総人口の43.02%を

占めている。ウイグル族は新疆の全地域に分布し、天山山脈の南にあるカシュガル（喀什）、ホウタン（和田）、アクソ（阿克蘇）及び東疆と呼ばれるハミ（哈密）、トルファン（吐魯番）に最も集中して居住している。漢民族も各地区に分布しているが、主に石河子、クラマイ（克拉瑪依）、奎屯、昌吉、クルラ（庫爾樂）等の北疆に居住している。

二. なぜ中国語の習得が必要なのか？

新疆は中華人民共和国の一部であるが、中国の少数民族は自分の民族の言語で教育を受ける権利がある。これは民族平等、言語平等の原則を貫徹しようとしている政府の政策である。また一方、新疆は歴史的、地理的に、また交通等の理由により、もともとは相対的に閉鎖的な地域であって、現在航空、鉄道、高速道路によって新疆と国内ないし海外とが緊密に結ばれるようになったとはいえ、世界の発展はもちろん、中国の沿海都市、中部地域と比べても経済、文化、科学技術、金融、貿易等の各方面において遥かに立ち遅れている。新疆を発展させるためには、海外の経験を参考にし、また海外の技術を導入するだけでなく、中国国内にある漢民族地域の発展経験を参考にすることで、その資金と技術を導入することによって、他の地域、特に東部沿海都市との協力関係を強めることが最も重要である。それを実現するためには、まず民族の教育水準を高め、他の地区との相互の交流を強めねばならない。民族の教育水準を高め、緊密な交流を実現するためには、先ず中国語の教育と学習が重要な鍵になることから、言語教育を重視しなければならない。WTOへの加入、西部大開発政策の実施と進行に伴い、新疆と国内の他の地区との交流、往来はますます頻繁になりつつあるが、政治、経済、文化、教育、ビジネス等の各分野において幅広く中国語（本稿で用いる「中国語」という語は、「普通話」（共通語）を指す）が必要不可欠なものになってきている。1994年の国家統計局、国家統計局国民経済総合統計司、国家民委経済司の統計によると、1993年全国で図書が96761種類出版され、発行部数は593372万冊、雑誌は7011種であったという。その中で少数民族文字で出版された図書は3500種あり、発行部数は5090万冊、雑誌は173種であった。この数字から読み取れることは出版物の99%は中国語で書かれたもので、中国語さえ把握すれば、中国で発表された国内外

の情報の99%を入手できるということである。従って、中国語は少数民族の日常生活と国内外との文化交流、ビジネス、貿易、科学技術分野での交流に不可欠な道具なのである。

三. 中国語教育と学習の現状について

中国政府はこれまで民族の言語政策を重視し、さまざまな政策、法律を立案・実行してきた。新疆ウイグル自治区政府は、民族の平等、団結、共同发展繁栄を重視し、少数民族の言語・文字を十分尊重した上で、国家の政策、法律に基づいて言語政策と双語（バイリンガル）教育政策を定め、少数民族が民族の言語を学習し、使用し発展させることを目的として、国民が自分の意志で中国語を学習し、使用するよう促した。そして何十年かの努力によって、顕著な成果が得られた。時代の発展につれて、中国語の習得が重要な位置を占めるようになり、少数民族の人々に認識されるようになった。以下では、現在の新疆の少数民族、主にウイグル族の中国語教育、学習の現状を幼稚園から大学及び教師について、資料に基づいて紹介する。

1. 幼稚園

日本にある保育園、幼稚園に対して、中国では殆どの人が共働きなので、幼稚園のような午前中だけ子供を預ける体制がなく、保育園のように朝から夜6、8時まで預ける幼稚園がある。また月曜日から金曜日、土曜日まで預ける私立の幼稚園もある。子供達は幼稚園で遊ぶだけではなく、国語や算数などの勉強もする。

子供は国の未来である。国内外の実験調査によって、五歳までが口語発達の第二の要であることが証明されている。しかし新疆の小、中学校では、中国語教育・学習のレベルが低いことが、少数民族教育事業の発展を妨げる要素になっている。新疆政府は小、中学校の中国語教育学習のレベルを高めることは、少数民族の中国語学習の年齢を下げることで実現できるのではないかとの議論にもとづき、実証研究を行うために、研究者達が1987年9月から1992年9月まで、準備段階の3年間を含めて、6年間をかけてウルムチ紅旗幼稚園と第20小学校（一年と二年生を対象に）で実証研究を行った。この研究から、実験クラスの児童の中国語能

力と知的能力が一般のクラスの児童より遥かに高く、児童の母語への影響も見られないという非常に満足できる結果が出た。現在、自治区は民族言語と中国語の両言語の同時教育を幼稚園から行うこと、民漢園の合併（少数民族語と中国語を用いる幼稚園の合併）を推奨し、民漢児童の混合クラスを実施することを提唱している。そこでは授業が単語から連語、連語から文、文から短文（児童に合う物語など）の順序で進み、視聴覚教育法を用いて言語環境を作り、遊びやゲームの中で教え、応用力をつけさせている。

2. 小、中学校（本稿で用いる中学校という語は高校も含む）

1984年自治区共産党委員会と政府が、新疆の民族学校の小学校3年生から中国語の授業を設けることを決めたため、新疆の少数民族は一律に小学校3年生から中国語の勉強を始めることになった。自治区教育委員会、小、中学校中国語教材編集委員会は九年義務教育六年制小学校向けの小、中学校中国語教科書を全部で10冊編集、出版した。

自治区の少数民族、小、中学校中国語教学大綱の規定によると、小学校3年生から高校卒業まで、民族小学校の中国語の総授業時間は1536時間（中国の小、中学校では普通45分～50分を1コマとする）で、小学校では536時間で、中学校では500時間で、高校では500時間と定めている。HSK（漢語水準テストで中国語を母語としないものに対する中国語レベルを検定する国家認定試験）において、初、中等は八級までの水準に分けられている。単純に1536時間の数字から見ると、HSKの中等C級（6級）の授業時間1500時間以上とほぼ同じだが、HSKの初等C級（3級）である、日常会話のできるレベルの所要授業時間は800時間よりずっと多い。

しかし、高校を卒業して大学に入学した少数民族の学生に対するHSK試験成績の調査によると、小学校3年から高校卒業までの10年間の中国語学習を経て、漢語水準が初級3級に達した人はわずかに半数ぐらいしかいなかった。それどころか一部の学生は3級にも達していなかったことが分かった。

「新疆ウイグル自治区語言工作条例」第三章第十八条は、次のように述べている。少数民族言語・文字を使って授業を行なっている小中学校は、当該民族言語・文字及び他の教育を強めると同時に、小学校3年生

から中国語課程を設ける。条件の整っているところは早めに設けてもよい。中国語教学が十分に行われれば、高校卒業時に少数民族の学生は当該民族の言語と中国語の両言語ともコミュニケーション可能なレベルに達する。しかし、HSKの調査結果からまだまだその目標に近づくまで時間がかかることはあきらかであった。

少数民族の漢語水準を高め、社会発展の需要に適応させるため、ウルムチ市では実験クラスを設立し、小学校1年生から中国語を学ぶこととした。中学校にも実験クラスを設ける学校もある。自然科学の授業は中国語で行われる。これらの実験はすでにより結果を出している。

中国政府は自治区の少数民族人材の養成を非常に重視している。科学教育で国を振興するテンポを速め、少数民族の優秀な人材を養成し、新疆の経済発展と社会の進歩を的確に促進するために、中国共産党中央の「新疆の安定維持に関する議事録」と国務院の弁公庁が配布した「教育部等の部門による少数民族地区の人材の養成工作を一層強化する意見に関する通達」（国弁発 {1999} 「85号」）の決定事項に従い、内陸地区で新疆高校クラス（以下新疆クラスと略称する）を設けることを決定し、2000年秋から新入生を募集し始めた。内陸地の発達した地区の経済、教育的優位性を利用し、その教育方法によって、新疆の発展を支持する事業を加速するためである。現在のところ、この事業は6年目に入っている。新疆クラスの修業期限は4年間（予備科中国語をある程度勉強し、レベルアップの1年間を含む）で、中国語で講義を行う。毎年新疆ウイグル自治区からその年の中学校卒業生1000人を受け入れ、1クラス40人で毎年25のクラスを設けている。在校学生総数は4000人で、100クラスになっている。内陸地新疆クラスは北京、上海、天津、南京、杭州、広州、深圳、大連、青島、寧波、蘇州、無錫等の主要都市に設けられ、教学条件や質のよい普通の中学校、または、条件にあう大学の附属中学校で設置している。目下新疆クラスの学生はそれらの学校の別クラスで授業を受けている。条件が整えば将来現地学生クラスに編入させ、現地生と同じ授業での学習へと移行させることが考えられている。

都市部から遠く離れた貧困地区の教育格差を縮小し、農業や牧畜業地区や辺鄙な貧困地区の多くの青少年にも質の高い基礎教育を受けさせ、絶えず新入生の募集規模を拡大するため、また内陸地新疆クラスに質の高い学生を送り込むため、自治区党委員会と人民政府は、中央政府の新

疆工作協調小組の会議主旨に従い、内陸地新疆クラスモデルとして新疆区内に中学校クラス（以下区内クラスと略す）を設けることを決めた。そこでは2004年に1000人、2005年に3000人、2006年に5000人、それ以降毎年5000人という規模で生徒を募集することになっている。募集対象は主に郷（鎮）と村の小学校のその年度に卒業する学生で、年齢は14歳（14歳含む）以下である。貧困県と国境に近い県にある县城小学校のその年の卒業生についても、優秀な生徒を採用してよいことになっている。

区内クラスは、自治区経済、教育条件の比較的によいウルムチ市、克拉瑪依市、石河子市、奎屯市、昌吉市、庫爾樂市、哈密市、阿克蘇市等八つの都市に設けられている。募集人数の30%はウルムチ市が引き受けるが、克拉瑪依市、石河子市、奎屯市はそれぞれ15%、昌吉市は10%、庫爾樂市、哈密市、阿克蘇市はそれぞれ5%を受け持つことになっている。学制は3年、全日制で、寄宿制方式をとっている。受け持つ都市の現地学生と区内クラスの学生を混合してクラス編成をしてもよいし、別々でクラスを設置してもよく、普通の中学校と同じ義務教育と見なされる。そこでは現地の中国語で授業をする学校と同じ教材と計画を用いて、中国語で授業を行う。ただし、これから当該民族向けの大学を受験する学生に対しては、中国語の授業とその民族の国語の授業を設置し、教学計画をそれにあうように調整せねばならない。生徒たちは中学卒業時、新疆統一の高校試験に参加し、成績が優秀なものは内陸地の新疆クラスに進学させる。ほかの生徒達は所在地域の区内クラスに進学する。

3. 大学、専門学校

小、中学校では言語、文字を持っている民族であれば、その民族の言語・文字で授業が行われ、民族学校に中国語の授業を設けて「自民族言葉と中国語両者に通じた」人材を養成目標としているが、大学、大專（3年制大学）には少数民族言語によって民族学校をそれぞれ設置することはしていない。少数民族の学生は大学に入ってからHSKを受け、その成績によってクラス分けを行う。各大学には中国語教育を行う予科（少数民族の学生の中国語能力を高め、専門分野の授業を中国語で受講できるようにするための部署である）を設置していて、中国語の勉強と教育を強化する。一般的には大学、大專（3年制大学）に入ると一部分の専門基礎科目と言語、文字、法律等の科目はウイグル語、カザフ語で行う

以外、自然科学科目は殆ど中国語で授業を行うことになっている。しかし、専門学校にはすべてウイグル語クラスとカザフ語クラスを設けている。予科で1年～2年をかけて中国語を勉強して試験に合格した者は各学部に行って専門知識の勉強をし始める。各学部では専門知識を学ぶ期間中に専門にかかわる中国語授業を設置しているが、それは予科で学んだ中国語の強化、学生の応用能力の向上が目的である。

また各大学によって科目の設置教学形式が異なる。中国の重点大学のひとつである新疆大学、出願者の最も多い財經学院と新疆医学院を例にして見よう。

1) 新疆大学

新疆大学の少数民族の学生は入学後、中国語のレベルチェックの試験(HSK)を受け、実際の中国語レベルによって、クラスを分けられる。予科にはクラスに快(早い)、中(中位)、慢(遅い)の三つを設け、7～8級の学生はトップクラスの快班(早いクラス)に、4～6級の学生は中班(中等程度のクラス)に、3級以下の学生は慢班(遅いクラス)に編入される。学生はここで中国語を重点的に勉強する。学生のレベルにしたがって授業の内容、進度が設定され教学計画が立てられている。原則として一学期に一級、すべての学生は四学期の間に四級をクリアしなければ卒業できない。成績優秀な学生に対し飛び級制度も設けている。中国語以外に専門分野の基礎科目、主に化学、数学、物理も勉強する。中国語の授業は一般的に週16時間で、専門学科の授業は6時間となっている。ここで1年または2年間中国語の勉強をしてから、各学部に戻り、専門科目の勉強に取り組む。

2) 新疆財經学院

新疆財經学院は、民族学生の中国語レベルをチェックする手段として最初にHSK試験を導入した大学である。入学した学生にHSKを受けさせ、成績が五級に達した者は直接学部で専門知識課程の授業が受けられることになっている。五級以下の者は予科で中国語の勉強をしなければならない。一年後、HSKの試験で五級以上に達した者は各学部に進み、専門課程の授業を受けることができるようになるが、達していない者は予科で学費を払ってもう一度履修する必要がある。このような方法によって予科教学には明確な修了基準が設けられるようになった。

現在大学の授業はすべて中国語で行なわれることを実施するようにな

り、学生の中国語レベルだけではなく、少数民族講師の中国語レベルも高まっている。

3) 新疆医学院

新疆医学院は、民族学生が実際に専門科目を学ぶ際のニーズに鑑み、聞き取り能力と読解能力を高める訓練が中国語の難関を突破する鍵であると考え、中国語相対直接教学法が実施されている。その主な方法と効果は以下のものである。

①最新の音声・映像利用教育、例えば、視聴覚教育を教室に導入する。

②授業は基本的に中国語を使うが、学生の母語を排斥しない。時に母語を用いると意外な効果が現れる。

③講師からの詳しい説明を少なくして、中国語運用基本技能及び「慣れ」を目指す訓練を重視する。

④学生の練習させる量を増やす。大量に読ませ、聞かせる訓練を行う。例えば、口語教育では学生の練習時間を75%以上にし、中国語の授業回数を24回から28回にする。これらの方法によって、学生の70%が1分間に250字が流暢に読めるようになった。最も遅い人でも1分間に180字が読める。漢字を書き写すスピードは最初の1分間10文字前後から2年間で33文字のレベルにまで達した。殆どの学生は1500文字の文章を20分で読み終えると同時に文章の中に出てくる重要項目を覚え、先生からの質問に答えることができるようになった。

以上の状況は、各大学が少数民族の中国語教育レベルアップのために、様々な工夫をし、研究に挑み、全力を尽くしていることを如実に物語っている。

4. 中国語教師について

少数民族の教育レベルを向上させ、「民漢兼通（自民族言語と中国語両者に通じた）」人材養成を実現する鍵は教師（講師）にある。目標とする人材を養成するためには、まず教師が「民漢兼通」でなければならない。自治区政府は中国語教師の養成を非常に重視し、教師を養成するために、大学、専門学校の募集計画に中学校等に中国語教師養成専門クラスを設けたのに加え、これまでに多くの専門知識を持つ中国語教師を全自治区の各地に送り出してきた。また、大学や専門学校にウイグル語、カザフ語クラスも設け、数多くの漢民族の「民漢兼通」の中国語教師を

養成した。しかし、残念なのはその中の多くの人が中国語教師の仕事についていないことである。その原因の一つは社会の中国語教師の重要性に対する認識が乏しいことである。多くの人々は、少数民族の学生に中国語を教えることは非常に簡単で、中国語が話せて少し少数民族の言葉ができればだれにでも教師ができるという考えを持っており、中国語教師という職業が軽視されている。また教師に対する待遇がよくないということも主な原因の一つである。現在新疆では、小、中学校の中国語教師の97.08%が少数民族である。漢民族の教師はわずか2.92%しかない。

1996年、ウルムチ市教育委員会の教育研究センター中国語室は、ウルムチ市にあるレベルの比較的高い少数民族中学校に在職している86名の中国語教師に、HSK レベルに類似する試験を受けさせた。満点は170点で、最高得点は161点で、最低得点は47点であった。その中の多数の参加者は6級にも到達せず、初級レベルにとどまる教師が40%以上に達した。ウルムチは新疆ウイグル自治区の政治、経済、文化の中心であり、この中国語教師のレベルがこの程度であるなら、他の農業、牧畜業地区の教師レベルは推してしるべしであろう。政府が中国語教師の養成に力を入れているのは確かだが、しかし現在生産力が低下している経済レベルの低い農業、牧畜業地区には中国語教師がおらず、中国語の授業が設置できないことも事実である。

四. 中国語教育、学習に伴う問題

ウイグル族には中国語の教育、学習における過程の中で解決しなければならないさまざまな問題が存在している。例えば、教師の不足、教師の資質問題、教材の問題、中国語学習に対する重要性の認識不足など山積しているが、ここでは次の三点について述べたいと思う。

1. 北疆と南疆の格差

先ず次の表を検討してみたい。

	昌吉市		和田市
人口	40.32万人（ウイグル族が7.7%）		19万人（ウイグル族が83%）
ウイグル語小、中学校数	1（今現在小学校はない）		58
小、中学生の中国語レベル	全員が自由に中国語で日常会話ができる。		中国語学校に通う学生の中国語の習熟度は85%で日常用語ができる程度。ウイグル語学校に通う学生の習熟度は40%前後しかない。
ウイグル族の中国語小、中学校への就学率	小学校 中学校	100% 50%以上	小学校1～3年 28%前後 小学校4～6年 15%前後 中学校 15%前後

昌吉市は北疆に、和田市は南疆に位置する。表を見れば、二大都市の格差は一目瞭然であろう。新疆の北疆と南疆のウイグル族と漢民族の分布が大きく偏っていることは無視できない。次の表を見よう。

北疆	ウイグル族人口の比率	南疆	ウイグル族人口の比率
ウルムチ	12.87%	喀什	89.7%
石河子	6%以下	阿克蘇	74.99%
克拉瑪伊	14.7%	和田	96.91%
昌吉市	7.7%	和田市	83%以上

北疆にある主な都市ウルムチではウイグル族の人口は12.87%、石河子では6%以下、クラマイ（克拉瑪伊）では14.7%、昌吉市では約7.7%にすぎない。逆に南疆にある主な都市カシュガル（喀什）ではウイグル族の人口は89.7%、アクソ（阿克蘇）では74.99%、ホウデン（和田）では96.91%を占めている。ウイグル族と漢民族の分布の差によって、中国語の教育、学習にもかなりの違いが出ている。南疆が北疆に追いつくのがなかなか難しいし、近い将来ということになれば不可能に近いだろう。なぜなら、置かれている環境、社会構成、文化などが異なるから

である。大体75%以上のウイグル族が生活している場所に置かれると、ウイグル語だけで何の不自由も感じず、むしろ漢民族がウイグル語が話せなければ不便になるわけであるから、漢民族にとって、ウイグル語を習得するいい環境だ。また、南疆の生産力が低下し、経済発展が立ち遅れていることも一つの原因である。逆に、ウイグル族が7.7%しかない昌吉市にはウイグル族が集中的に住んでいるのではなく、就職箇所が分散している。半分近くの人が政府機関、事業、企業の会社で働いており、その就業環境から、彼らはすでに中国語を使い慣れている。一部の児童、少年はウイグル語で自由にコミュニケーションをとることができなくなり、ウイグルの文字を自由に使えない人も珍しくない。ウイグル族の学生の中国語学習は自明となり、教育行政部門は中国語の教育、学習を強調する必要がなくなり、目下ウイグル族教師の中国語レベルを高めることの方が主要な課題になっている。

2. アンケート調査に見る認識の差

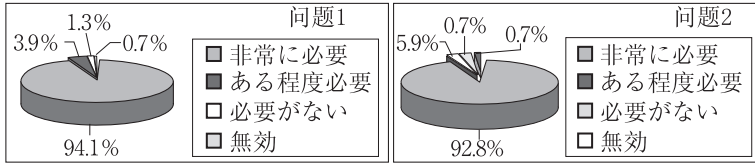
王洋氏の修士論文「新疆維吾爾族語言態度探析」¹⁾に取り上げられたアンケート調査の数値を借りて以下にグラフ（問題1～問題9）を作成した。被調査者人数は153人で、すべてウイグル族である。調査地区はウルムチとトルファンの両地区である。ウルムチは108人で、トルファンは45人（葡萄溝郷19人、B庫西墩村26人）である。以下問題の順を追って分析する。

問題1：本民族語の学習、把握が必要だと思いますか。

非常に必要（144人） ある程度必要（6人） 必要がない（2人） 無効（1人）

問題2：中国語の学習、把握が必要だと思いますか。

非常に必要（142人） ある程度必要（9人） 必要がない（1人） 無効（1人）

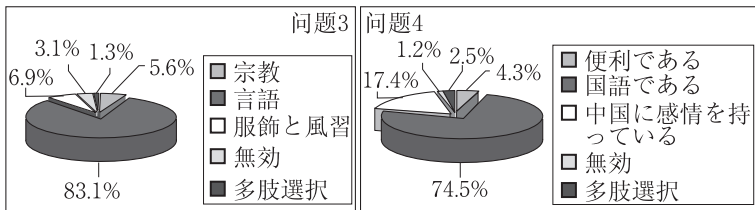


問題3：民族の最も重要な特徴は

宗教（9人） 言語（133人） 服飾と風習（11人） 無効（5人） 多肢選択（2人）

問題4：中国語を学習、使用する理由は

便利である（7人） 国語である（120人） 中国語に感情を持っている（28人） 無効（2人） 多肢選択（4人）

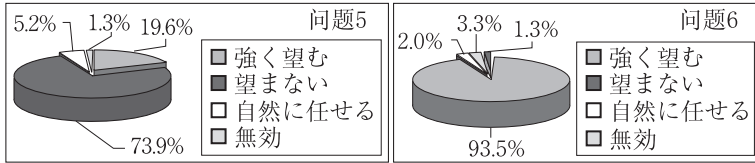


問題5：本民族全員がウイグル語しか話せない単一言語者になるのを望みますか。

強く望む（30人） 望まない（113人） 自然に任せる（8人） 無効（2人）

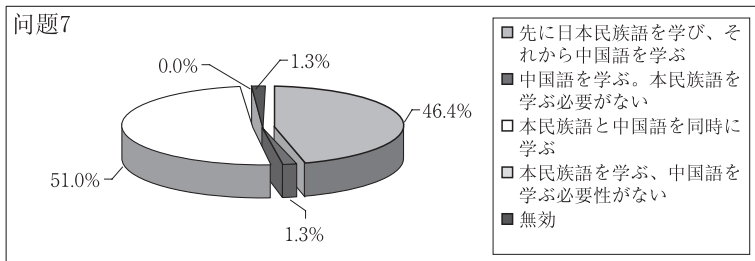
問題6：本民族全員がウイグル語も中国語も話せるバイリンガルになるのを望みますか。

強く望む（143人） 望まない（3人） 自然に任せる（5人） 無効（2人）



問題7：もしあなたが入学前に中国語が分からないなら、入学後次の方法を望みますか。

- 先に本民族語を学び、それから中国語を学ぶ (71人)
- 中国語を学ぶ。本民族語を学ぶ必要がない (2人)
- 本民族語と中国語を同時に学ぶ (78人)
- 本民族語を学ぶ、中国語を学ぶ必要性がない (0人)
- 無効 (2人)

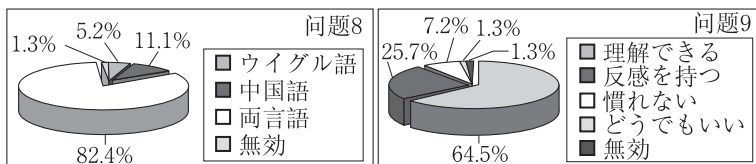


問題8：学校は本民族の子供たちに授業中、次の手段のどれかを使ってほしいですか。

- ウイグル語 (8人) 中国語 (17人) 両言語 (126人) 無効 (2人)

問題9：家族または隣近所の人が中国の内陸地で何年間勉強または仕事した後、新疆に戻りたくなく、本民族語も話したくなくなったら、あなたは思うのでしょうか。

- 理解できる (98人) 反感を持つ (39人) 慣れない (11人) どうでもいい (2人) 無効 (2人)



以上のデータから見ると、ウイグル族の人々は全体的にいうと自分の民族の言葉に深い愛着心、感情を持っているにもかかわらず、中国語を学ばなければならないという自覚と緊迫感を持っている。時代の進歩、社会、経済の発展に伴い、中国語の重要性をつくづく感じ、経済、文化、科学の先進性に憧れるのは当たり前だと認識している。このことから、問題9のように自分の民族の言葉を捨てる行為にも多くの人が理解を見せる結果になったと思われる。

続いて、トルファン市の葡萄溝郷と庫西墩村の農民に対するアンケート調査のデータを比較してみよう。

問題1：あなたは最も重要な民族特徴は何だと考えますか。

	宗教	言語	服飾と風習	無効
葡萄溝郷	15.3%	77%	7.7%	
庫西墩村		100%		

葡萄溝郷では「宗教である」と思う人は15.3%で、「服飾と風習である」と思う人は7.7%で、「言語である」と思う人は77%いる。庫西墩村では全員が言語を選んだ。

問題2：あなたは本民族全員が中国語しかできない人間になってほしいですか。

	強く希望する	希望しない	自然に任せる	無効
葡萄溝郷	15%	55%	15%	15%
庫西墩村		90%		10%

表から見ると、「強く希望する」と「自然に任せる」を合わせて、反対しない人の数は葡萄溝郷では30%いるが、庫西墩村では90%の人が反対する。

問題 3：入学する前に中国語ができないなら、入学後の希望はどれですか。

	①まず本民族の言語を学んでから、中国語を学ぶ。	②中国語を学ぶ、本民族の言語を学ぶ必要がない。	③本民族の言語と中国語を同時に学ぶ。	④本民族の言語だけを学ぶ、中国語を学ぶ必要がない。
葡萄溝郷	62%		38%	
庫西墩村	100%			

葡萄溝郷では62%の人は①を、38%の人は③を選んだが、庫西墩村では全員が①を選んだ。

問題 4：あなたはウイグル語と中国語両方ともできる人と話をするとき、あなたがウイグル語を使っているのに、相手が中国語で返事するのなら、どう思いますか。

	賛成する	反対する	不満に感じる	無効
葡萄溝郷	85%	7.5%	7.5%	15%
庫西墩村	10%		85%	5%

葡萄溝郷では賛成する人は85%で、反対する人は7.5%、不満に感じる人も7.5%である。庫西墩村では賛成する人はわずか10%しかいない。不満に感じる人は85%もいることから、庫西墩村と比べると葡萄溝郷の方が遥かに外来文化に対する受容性を持っている。

問題 5：あなたは現地のテレビ、ラジオ放送の使う言語として次のどれを希望しますか。

	ウイグル語	中国語	ウイグル語と中国語両者	無効
葡萄溝郷	38%		62%	
庫西墩村	95%	5%		

葡萄溝郷ではウイグル語を希望する人は38%で、ウイグル語と中国語

の両者とも希望する人は62%である。庫西墩村ではウイグル語を希望する人は95%にもものぼった。ウイグル語と中国語の両者を希望する人はわずか5%しかない。

トルファンは新疆で非常に有名なところで、そこにある葡萄溝郷は旅行開放地区であり、外国人だけではなく、中国の内陸地から来る人も毎年数多くいる。庫西墩村は観光スポットではないため、ここの農民は相変わらず主に農業に従事しており、相対的に言えば、まだ閉鎖的な社会環境に生活している。

以上の五つの問題を通して、比較的に開放された観光スポットである葡萄溝郷の農民は相対的に閉鎖的な庫西墩村の農民より、外来文化への受容力に富んでいることがわかる。中国語は葡萄溝郷の農民から見ても、すでに欠かせないものになっているが、庫西墩村の農民にとってはなによりも本民族の言語が大事であり、自民族の言語の方が重要だと位置づけている。民族の自覚も強いと言えるだろう。

トルファンと比べれば、南疆地区はさまざまな面において発展が遅れている。人々の考え、意識も割合に保守的である。トルファンの葡萄溝郷と庫西墩村でさえ認識の差が存在しているのなら、南疆で同じアンケート調査をすれば、必ず更に大きな差が出ると予測できる。

3. 中国語を習得した人の悩み

新疆社会科学院民族研究所研究員である李曉霞の「両難的選択——對少数民族学生進入漢語授課学校的調查与分析」という一文に載せる、二つの事例を簡単にまとめて以下に引用する。

事例1：Gさん、34歳、ウイグル族。両親はともに政府幹部で、彼女は小さいころから政府役員専用の大きな区画内の住宅地に住んでいた。周りには漢民族が多かった。漢民族が通う学校（以下「漢校」と略す）に入学、友達の殆どは漢民族であった。高校卒業後教師になり、中国語と英語を教えた。9年後現在の役所で働くようになった。夫も同じ漢校の卒業生である。子供は二人とも少数民族（主にウイグル族）が通う学校（以下「民校」と略す）に入学している。下の娘は漢民族の多い幼稚園を卒業したとき、中国語が非常に上手に話せたが、当時娘に漢校と民校のどちらに入学させるかを決めるため、何度も家族、親戚、友達と相談をした。考えた結果、民校を選んだ。その理由の一つは、中国語は得

意でウイグル語の口語も悪くないが、ウイグル語を書く能力が低く、中国語は書いてもウイグル語が書けないことを恥じている様子であったことである。もう一つの理由は現在住んでいるところの周りがウイグル族ばかりで、子供の友達も殆どウイグル族だったことである。Gさん自身はずっと漢校に通ってきたので、本民族の同級生、友達が少なく、今それを非常に残念だと思っている、子供に自分と同じような思いを味あわせたくなかったのからである。

事例2：Aさん、ウイグル族。父親は政府幹部である。幼稚園から大学卒業まで、ずっと漢校に通っていた。ウイグル語で話すことはもちろん、独学でウイグル文字を習得し、書くことも読むこともできる。しかし、彼女の言うには自分の中国語のレベルは、遥かにウイグル語を超えている。夫は大学時代だけ6年間内陸地の大学で過ごしたため、中国語がかなり上手だが、物事に対する考え方にたびたび相違が出る。娘が二人いるが、長女は民漢混合中学校の中国語授業の三学生、下の娘は四歳で会社の幼稚園（漢民族が多い）に通っている。ウイグル語を鍛えるために、彼女は家でできるだけウイグル語で娘に話しかけ、ウイグル語を使って表現するよう要求している。また、長女にウイグル語の小学校テキストを買い与えて、ウイグル語を勉強させ、簡単な閲読が自分できるように、そして、できるだけ近所のウイグル族の友達と遊ぶように要求している。しかし、長女のウイグル語は小さいころと比べて、明らかにレベル落ちをしている。このまま行くと、将来長女の英語もウイグル語を超えるだろう。その上、漢校の宿題が多すぎて、漢民族の子供はウイグル族の子供ほど明るく、活発ではないことから、長女の性格も心配らしい。目下よく勉強のできる長女に中学校を卒業後、民校に行かせるかどうか、下の娘を民校に入学させるかどうかで悩んでいる。民校に行かせれば、将来子供が自分のように自民族の言葉に習熟していないことに悩まずにすむし、多くの本民族の友達も作れる。だが、民校の教育の質に楽観できないという話を聞くと、気持ちが揺れてしまう。

このような悩みを抱えている人はこの二人だけではなく、かなりいると思う。中国語を習得したものの、自民族の集まって住んでいるところで、自民族の言葉を自由に使えないこと、友達などを失うことに悩むことは理解ができる。民族の言葉は民族の自尊心と強く結びついて、切り離すことはできないのである。

むすび

中国の経済、科学技術の発展、文化の進歩につれて、立ち遅れている地区の人々が中国語を勉強して、先進的な技術、文化を学び、それによって立ち遅れの状況を変え、先進地区に追いつこうとすることは必然の流れで、当たり前なことであろう。現在北疆と南疆には中国語教育と学習の状況にかなりの格差がある。それは歴史、環境、経済、文化など様々なことに関連している。

今の南疆はまだ比較的閉鎖的で、そのウイグル族の人は中国語、中国文化に接触することも少なく、特に興味を示すわけでもなく、また、将来の職業に必要ということもない。中国語が必要だとは感じないし、理想の状況にもおかれていないと言える。従って、進んで「民漢兼通」を提唱、促進することは、逆に民族の自尊心を傷つける可能性がある。

この二つの背反する現状をどう打開したらよいのだろうか。第二言語習得の面から考えてみると、第二言語習得には学習動機が大きく作用しているが、動機が強ければ、学習効果も明らかによくなる。生活と発展の需要は学習動機づけの最も重要な心理要素で、需要さえあれば、動機が生まれる。「対象文化と言語を賞賛し、第二言語学習から自ら何かを得ようと欲し、知識を渴望するのは（第二言語習得の）理想的な状況である。」²⁾

そこで新疆の経済、教育の発展を軸に、特に遠隔教育の全面応用によって、辺鄙、貧困の地域でも中国語を聞き、漢民族の文化を知り、様々な情報を得ることもできるようにすることを徹底的に実施するように強く勧める。そうすれば、生活の改善と自民族の発展への渴望によって次第に多くの人たちが中国語を勉強する必要性を認識するようになるだろう。そうすれば、自覚的に、自ら進んで中国語の学習に取り組むだろう。その一方で、祖国の統一を守り、民族の団結を強め、相互の理解を深めるために、新疆にいる漢民族も「民漢兼通」を目指して、ウイグル語など少なくともひとつの少数民族のことは学習すべきではないかと考える。特に政府機関、教育部門、銀行、サービス業などで働いている漢民族の人たちに、具体的に少数民族言語学習への要求を出したほうがいいのではないかと思う。

上述のように、中国語を学習することで、民族のアイデンティティを失う危険を感じて、子供たちに学習させるのをやめる事例を見たが、われわれは母国語を失うことなく中国語が習得でき、共に熟達両言語とも上達できるバイリンガル教育の方法を研究し、方策を案出して行くべきであることを強調したい。

注

- 1) 王洋 (2004) 「新疆維吾爾族語言態度探析」 新疆師範大学修士學位論文
- 2) ビビアン・クック著 米山朝二訳 (1993) 『第二言語の学習と教授』p.103 研究社出版

参考文献

- 王振本 梁威 阿布拉・艾買提 張勇著 (2001) 『新疆少数民族双語教学与研究』 民族出版社
- 厉声 (2003) 『中国新疆歴史与現状』 新疆人民出版社
- 李曉霞 (2000) 「兩難的選択—對少数民族学生進入漢語授課学校的調查与分析」 『新疆師範大学学報』 (哲学社会科学版)
- 祁進玉 (2003) 「少数民族双語教学的現状及發展趨勢」 『青海民族研究』 (社会科学版)
- 王阿舒 孟凡麗 (2006) 「新疆少数民族双語教育政策發展綜述」 『民族教育研究』